

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12360

研究課題名（和文）日本語・琉球語における情報構造と述語類型

研究課題名（英文）Information structure and predicate types in Japonic languages

研究代表者

中川 奈津子（Nakagawa, Natsuko）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・特任助教

研究者番号：50757870

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：東京方言では、助詞、語順、韻律などの手段により情報構造を表しているが、それぞれどのように使い分けられているのかを明らかにした（Nakagawa, 2020）。東北方言は格や情報構造をほとんど明示しない言語だが、助詞の代わりに構文を変えることで、文中のどの部分が前提でどの部分が断定なのかを示していることが明らかになった（中川, 2020）。また、鳩間方言、うちなーぐちなどのデータベースを公開し、青森県野辺地方言と南琉球八重山語白保方言の音韻の一端について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日琉語族の情報構造表現の変異を記述することにより、同じ語族の中でどのような表現の可能性があるのか、ある類型論的特徴（e.g., 助詞の頻度が低い）が情報構造の表現を制約する可能性を明らかにした。また、消滅の危機にある言語の大規模なデータベースを作成して公開することで、継承話者の学習に役立つ、フィールドワークに行かなくても研究できるデータを広く一般に提供した。

研究成果の概要（英文）：I studied information structure of Tokyo Japanese and Tohoku dialect. In Tokyo Japanese, I studied how information structure is expressed in particles, word order, and intonation. In Tohoku dialect, which often lacks particles, how different information statuses of a constituent is expressed in different constructions. I and colleagues also published databases of Hatoma dialect and Okinawan, and some papers on phonology of Noheji Dialect, Aomori, and Shiraho dialect, Yaeyama Ryukyuan.

研究分野：言語学

キーワード：方言学 情報構造 日本語 琉球諸語 格体系

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、日本語と琉球諸語(八重山語)の名詞標識、および述語の時制、相、法、コピュラの有無、そして終助詞の関連を自然発話データをもとに定量的に明らかにする。これにより、情報構造と叙述類型の関連を解明することを目的とする。叙述類型とは、時間に束縛されて成り立つことを表す事象叙述 (e.g., 「嘘をついた」) と時間に束縛されない属性叙述 (e.g., 「嘘つきだ」) に分類され、言語の様々な側面に重要な影響をもたらすことが明らかとなりつつある (益岡 2008, 影山 2012)。この類型は情報構造にも影響を与えており ((2) 参照)、諸言語の情報構造にまつわる現象を理解する上で新しい観点を提供すると期待される。本研究では叙述類型を、話者への命題の態度の違いとして捉え、日本語と琉球語(特に八重山語)を対比しながら情報構造に関する現象を叙述類型の観点から捉え直し、理論的、記述的貢献を目指す。

2. 研究の目的

前述の通り、叙述類型と情報構造には何らかの相関があると考えられるが、詳細はまだ明らかではない。例えば、(2-a) を「幸子というのは、嘘をつく」と現在形にすると、容認度が幾分上がり、直感的には属性叙述に少しだけ近づくように思われるが、なぜそうなるのかは不明である。また、琉球諸語に広く見られる -n (-m) で終わる動詞の形式は、一般的に過去形と共起しないが (狩俣 1997)、この理由もまた自明ではない。本研究は、このような情報構造と叙述類型の関係を、実際の発話データから定量的に明らかにすることを試みる。日本語と琉球語(特に八重山語)を対比しながら、叙述類型という新たな観点から、情報構造に関する現象を捉え直し、理論的、記述的貢献を目指す。

3. 研究の方法

『日本語話し言葉コーパス』と、申請者と共同研究者のフィールド調査により収集した青森県南部野辺地方方言と琉球八重山語の自然発話データを用いる。まず、そのデータ中に出現する主題標識、焦点標識、格標識を同定する。日本語の調査対象を (5)、八重山語の調査対象を (6) にあげる。なお八重山語の音韻目録と音韻規則、基本的な形態素と文法概要は、中川ほか (2015; 2016) においてすでに記述されている。この調査の過程で判明した音韻、文法現象などは順次記述して発表していく。

4. 研究成果

大規模な日本語話し言葉の実例を用いて、日本語における助詞・語順・韻律と情報構造の関係を調査してきた (Nakagawa, 2021 など)。日本語において、大量の話し言葉の実例を用いた情報構造に関する定量的な研究はまだなかったので、申請者の研究がその先駆けと言える。具体的な発見は以下である。(i) 日本語話し言葉に現れる様々な主題標識 (トイウノハ、ハ、ダケド) は Prince (1981) の Given-New Taxonomy の階層の違いだけでなく、項構造によっても使い分けられている。(ii) 無標識(無助詞)には主題標識と焦点標識の2種類あり、焦点標識の無助詞は東京方言では活格型の分布を持つ。(iii) 後置文 (e.g., 「おいしいねこれ」) における後置要素 (e.g., 先の例の「これ」) は、直前の文脈で言及されたものか、会話の参加者の目の前にあるものを指示する。このような後置文は節内のイントネーションの構造によって動機づけられている。(iv) 主題はイントネーションによって述語と切り離されていることが多く、焦点は述語と一緒に現れやすい。また、以上の事象の動機づけを、情報構造とヒトの認知に関する法則として、

仮説的に提案した。

また、格助詞・係助詞が乏しい青森県むつ市方言に関して、名詞標識よりもむしろ構文(分裂文)を用いて情報構造の違いを表現していることを明らかにした(中川, 2020)。八重山諸語の主格標識と思われる =nu の出沒には指示性が関わっていること、関西方言(京都と滋賀県長浜市)の =ga の出沒には有性性と指示性が関わっていることなども明らかにし、小規模の研究会で発表した(中川, 準備中 a;b;c)。

他にも、青森県南部野辺地方の音韻(中川, 2021)、琉球八重山白保方言のアクセント(中川・セリック, 2019; Celik & Nakagawa, 2019)、琉球諸語を中心とする語彙のデータベースの整備や辞書の出版などを行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中川奈津子	4. 巻 -
2. 論文標題 むつ市方言の格と情報構造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青森県むつ方言調査報告書	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002998	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中川奈津子、セリック・ケナン	4. 巻 44
2. 論文標題 南琉球八重山語白保方言の語彙リスト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 283-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 K. Celik and N. Nakagawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Two types of falling word-tone in Shiraho, Yaeyama, Southern Ryukyuan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 In Sasha Calhoun, Paola Escudero, Marija Tabain & Paul Warren (eds.) Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences, Melbourne, Australia 2019	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 R. E. Nunez, K. Celik, N. Nakagawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Absolute spatial frames of reference in bilingual speakers of endangered Ryukyuan languages: An assessment via a novel gesture elicitation paradigm	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of CogSci2019	6. 最初と最後の頁 890-896
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 N. Nakagawa, M. Yamada, N. Kibe, Y. Takubo
2. 発表標題 Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report
3. 学会等名 Language Technology for all (LT4ALL) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川奈津子、セリック・ケナン
2. 発表標題 琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない
3. 学会等名 日本語学会2019年度春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Celik, Kenan and Nakagawa, Natsuko
2. 発表標題 Two types of falling word-tone in Shiraho, Yaeyama, Southern Ryukyuan
3. 学会等名 International Congress of Phonetic Sciences 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川奈津子、セリック・ケナン
2. 発表標題 琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない
3. 学会等名 日本語学会2019年度春季大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 加治工真市 (著)、中川奈津子 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 1881
3. 書名 鳩間方言辞典	

1. 著者名 Natsuko Nakagawa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Language Science Press	5. 総ページ数 250
3. 書名 Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation	

1. 著者名 中川奈津子、寺崎智之、web japanese編集部	4. 発行年 2019年
2. 出版社 webjapanese.com	5. 総ページ数 -
3. 書名 ニホンゴ: 「外」から見た日本語	

1. 著者名 青井隼人、阿部貴人、有田節子、有元光彦、五十嵐陽介、井上 優、大槻知世、大西拓一郎、小川俊輔、菊澤律子、衣畑智秀、木部暢子、小西いずみ、相良啓子、佐々木冠、笹原宏之、重野裕美、渋谷勝己、下地理則、中川 奈津子ほか19名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 192
3. 書名 明解方言学辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------